

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 30 年 6 月 12 日現在

機関番号：11301

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2014～2017

課題番号：26370042

研究課題名(和文) 性理大全書の思想史的研究

研究課題名(英文) Research on the Intellectual History of Xinli Dachuanhu(Great Collection of Works on Nature and Principle)

研究代表者

三浦 秀一 (MIURA, Shuichi)

東北大学・文学研究科・教授

研究者番号：80190586

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,800,000円

研究成果の概要(和文)：本研究課題は、明朝の第三代皇帝である永楽帝の命令を受けて編纂された朱子学系叢書・三大全のひとつである『性理大全書』の士大夫社会における普及の実態を、思想史的展開とも関連づけながら解明するものである。文献調査の結果、この書物には、正徳年間以降、幾つかの注釈書が作成されるとともに多様な節略本や批判的著作もまた編纂され、明末期には、陽明学の浸透に伴いその改定も検討されたことがわかった。そしてこの風潮は王朝交替後もその一部が引き継がれ、康熙帝による『性理精義』として生まれ変わったのである。

研究成果の概要(英文)：The aim of this project is to comprehend the actual situation of dissemination of "Great Collection of Works on Nature and Principle" which is one of "Trilogy" as Zhuzi learning series compiled under the order of Emperor Yongle, the third emperor of Ming dynasty, relating it to historical development. As a result of the literature survey, I clarified that several annotations of this book are prepared after the Zhengde period, various diverse savings books and critical writings are also compiled, and preparation of a revised version was considered along with the penetration of Yangming learning in the late Ming. A part of this trend was succeeded even after the dynasty change, and it was reborn as "Essential Meanings of Works on Nature and Principle" by Emperor Kangxi.

研究分野：中国近世思想史研究

キーワード：性理大全書 明代 朱子学 陽明学 科挙

## 1. 研究開始当初の背景

明朝永楽帝の命令を受けてから一年もたずに完成された勅撰の三大全に対しては、清初期の顧炎武以降、近代に至るまで、その思想的価値を低く見積もるのが通常であり、それ故に同書を研究の対象と捉える視点や方法もまた確立されないままであった。しかしそうした状況は徐々に改善され、『四書大全』や五経それぞれの大全に対する研究に関しては、佐野公治や林慶彰およびその後継者たちの業績から知られるとおり、一定の蓄積を得ることができた。だが残る『性理大全書』に対しては、吾妻重二による先駆的な研究以外、依拠するにたる業績はほとんど皆無であり、かつまたそれを打開する糸口も見つけられずにいた。

しかし申請者は、大全書にも多様なテキストが存することを文献調査の結果把握するとともに、明朝科挙の論題として大全書所収の片言断句が頻繁に使用され、策題としてもその性理策に活用されることについても、科研費による過去の研究において解明しており、こうした視点にもとづくことによって、大全書に対する停滞した研究状況の改善が可能だと判断するに至った。

## 2. 研究の目的

書誌学および科挙関連の研究分野における成果にもとづく独自の視点のもと、『性理大全書』が編纂され、また人びとに受容された歴史の全体を、思想的観点から分析・統合することが、本研究課題の目的である。

その受容の歴史は、(1) 大全書の編纂を前後する元代末葉から明代前期まで、(2) 増注本が民間の書肆から相継いで刊行された明代中期、(3) その多様なバリエーションが続出した明末清初期、という三つの時期に分けることが可能であり、本研究は、それぞれの時期における『性理大全書』関連の諸問題を多面的に解明し、それらを有機的に関連づける。

## 3. 研究の方法

国内外の機関において『性理大全書』の諸本および関連する性理学書を可能な限り調査し、その結果にもとづいて同書の成立および増注本の出現に関わる書誌学的・思想的分析をおこなう。それと平行して、郷試や会試の試験問題や答案においてこの書物が如何に利用されたのか、多様なテキストを精査しつつ、この問題の解明をはかる。大全書やその増注本さらには関連する諸文献の作成や出版に関わった地方官僚のいわゆる個人情報収集分析するのである。

このような方法を駆使しながら上述した同書の三つの歴史的段階ごとに考察をすすめる、その過程において得られた知見を中国近世思想史ないし社会史の研究に還元し、当該研究の全体的な深化をめざす。

## 4. 研究成果

永楽の『性理大全書』七十巻は内府本系統のテキスト各地の学校に頒布された。しかし明代中期の正徳年間以降、そのテキストに豊富な量の注釈を加えた増注本が坊刻され、それらもまた「大全」の名称を与えられて版を重ねた。またこれら大全書群の周辺には同書の節略本や改訂本さらにはそれを批判する書物も出現した。王朝交替後、その趨勢はやや幅を狭めながらも、しかし清代康熙朝まで続き新たな勅撰の性理書が誕生した。

以上のように概括できる『性理大全書』の歴史に関して、ここでは書誌学的な調査結果を記しておきたい。

四庫全書存目叢書は、首都図書館蔵『性理群書大全』七十巻を影印のうえ収める。また『明代版刻綜録』が採る「性理群書集覧」に対し同書はこのテキストの刊行時期を正徳六年とする。一方、北海道大学文学部図書室は正徳七年重刊の『性理群書集覧大全』七十巻を収蔵する。国立公文書館内閣文庫所蔵の正徳十一年刊『性理大全書』も「集覧」等を収める集註本であり、この書名が勅撰の大全書をいわば僭称するものであったことが推察される。以上が大全書の初期的注釈書であり、注釈の材料は、南宋以来の性理学関連書であって、その傾向はつづく嘉靖期にも拡大的に受け継がれる。

東北大学図書館は、その大尾に「嘉靖戊申(二十七年)歳孟春王氏新三槐刊行」との木記を置く『新刊性理大全』七十巻を収蔵する。先行する『標題集覧補註大全』に依拠し、そこに「集考」、「集解」、「解註」などの注釈を豊富に載せた新編のテキストである。ただし北大正徳本を直接の底本とした可能性は、おそらく低い。『(稿本)中国古籍善本書目』は、嘉靖十三年刊王氏三槐堂『新刊性理大全』を採録しており、このテキストが、新三槐本の粉本だと推察する。内閣文庫には嘉靖三十九年刊『新刊性理大全』も収蔵される。このテキストは、御製序の末尾に「嘉靖十九年葉氏廣勤堂校正重刊」との文字を記し、一方、巻末の蓮牌木記には「嘉靖庚申(三十九年)孟秋進賢堂梓新刊」と刻むものであり、東北大新三槐本とその版式や注釈を酷似させる。ただし内閣文庫進賢堂本は、東北大新三槐本に載る「解註」を組み込んでいない。ところが興味深いことに、東京大学東洋文化研究所が所蔵する嘉靖三十九年進賢堂刻本には、その「解註」が存する。東大進賢堂本は、御製序末尾に「嘉靖庚申年 氏 校正重刊」との文字を刻む。「庚申」はおそらく補刻であり、は、書坊の名が削られたままの、空格の箇所である。米沢市図書館は、嘉靖三十一年『新刊性理大全』を所蔵する。御製序末尾に「嘉靖壬子年余氏雙桂堂校正重刊」と刻み、大尾に「嘉靖壬子孟秋雙桂書堂新刊」との蓮牌木記を置く。その版式や註釋は東北大新三槐本に酷似する。ただし米沢市雙桂堂本の場合、巻尾題の形式は、一部、進賢堂本のそれ

に類似してもいる。たとえば「二十三」を「廿三」と刻するのである。

以上の事実からは、内閣文庫進賢堂本から東大進賢堂本へという継承関係と、その中間における雙柱堂本の影響、ならびに雙柱堂本に対する新三槐本の影響を想定することが可能である。さらに、内閣文庫進賢堂本が廣勤堂本の「重刊」本であり、また新三槐堂本が三槐堂本に拠った可能性があることから、この二系統を生み出した共通の祖本の存在も想定しうる。その祖本が、既知のどの諸本よりも北大正徳本に近いテキストなのであろう。その他、九州大学碩水文庫所蔵の『新刊性理大全』は、その大尾に「皇明嘉靖癸丑（三十二年）仲夏熊氏一峯堂重校刊」との木記を有する。形式も内容も内閣文庫進賢堂本に似たテキストである。

万曆以降の注釈書系大全は、基本的に「新刊性理大全」の構成を逸脱するものではない。注目すべきは、これらの増注版がいずれも「新刊性理大全」と称する点である。この書物が普及したその結果、明末のみならず、現今に至るまでも、性理大全書から「書」の一文字が省略され、「性理大全」とする呼称が一般の通念となった可能性がある。清代中期、増注版の大全書を永楽の大全書とする錯覚が社会の共通認識となっていたと仮定するならば、四庫館臣の推断、すなわち『性理大全書』とは『性理群書句解』などの文章を適宜引用して「広」げられた編纂物だとした判断も、あながち見当違いだとは言いにいくくなる。上に挙げた注釈書としての「性理大全」は、まさしく『句解』等の先行する書物にその材料を負う書物だからである。

『稿本中国古籍善本書目』（子部上）によれば、嘉靖十年三槐堂刻『新刊性理白文輯略要語』四巻が現存する。大全書に対する節略本としては早期のものだが、実見できていない。「新安雲峰譚澤編輯・宇南何君楚參校」の『性理選粹』二巻には万曆四年周文奎刊本がある。巻頭に永楽帝の御製序を載せ、上下二巻のなかに、大全書七十巻の文章を大幅に省略しながらも掲載する。大全書巻三「通書後録」所収の「顔子所好何論」や巻三十三「性理五」所収の「定性書」を独立させて採録している点が特徴である。許順義が編纂した『鐫性理精抄』十二巻には、万曆二十年余氏萃慶堂刻本がある。序文以降は二段組みの体裁であり、上段に「論題」が附記される。本文の第一巻は太極図と通書とを節略し、続く第二巻には「定性書」が載る。編者はそこに注記を附し、「其語極粹、旧書類入理性門、今特掲之於図書之後、且以見先生之学之所本之」と言う。ここで「図書」とは程子の師匠である周子の太極図と通書を指す。上述『性理選粹』を受け継ぎ、大全書の選定基準およびその配列に異議を唱えた。

このような書物に較べれば、李廷機撰・虞淳熙校の『性理要選』四巻には独自性が少な

い。ただしこのようなものが節略本の嫡流であった。同書はまず虞淳熙の「題李太史性理要選序」を載せ、以下二段組みで、御製序、「性理要選目録」、本文と続く。上段は基本的に「論題」であり、下段の本文は大全書七十巻の節略である。巻尾に刊記が附される。万曆十八年二月、錢塘楊繼時が著したもので、「我文皇集諸儒臣、彙漢唐宋以來諸理学家言、是為性理大全、其旨亦既核且博矣、今九我李君復摘其粹者、以便学人、命之曰性理選、梓而伝焉」との文章が載る。科挙受験者が購入することを念頭に置いた商品だといえる。

一方、詹景鳳が編纂し万曆十八年十一月執筆の自序を附した『詹氏性理小辨』六十四巻は、大全書に対する批判意識の明確な書物である。たとえばその「論例・証故例」に「其篇目雖踵性理大全、不無更改損益其間、良以其藁集頗屬腐爛支離、不得不加釐正」と記される。姚舜牧が撰述した『性理指帰』二十八巻には万曆三十八年執筆の自叙が付き、大全書を評して「唯此編卷帙浩繁、読者苦不能悉、且其中兼收象数、語或更入玄秘、読者猝不能解、以是覽輒廢巻」という見解を示す。浩瀚な大全書のなかでも、読者が理解しにくい部分はとくに削除されるべきだというのである。「詹淮纂輯・陳仁錫訂正」崇禎五年刻本の『性理標題綜要』二十二巻は、その「性理綜要譚藪」に「王守溪・丘月林・商素菴・王陽明・羅近溪・薛方山」各氏の言葉を載せる。同時代の学者による認可を標榜するわけであり、また「性理綜要總目」は大全書のそれに較べて詳細である。読者ないし学習者への配慮がうかがえる。

鍾人傑が撰述した『性理会通』七十巻・続編四十二巻のその正編はまるごと大全書である。使用テキストは、「集覽」を含む増注本系統のものであり内府本系統ではない。ここからも「新刊性理大全」の普及状況がわかる。続編について、まずその第一巻から第十五巻までの書名とその著者名とを挙げる。易から楽へ、そして礼に至る配列であることが知られる。「元包・潜虚」以降の著者はすべて「皇明姓氏」に載るのだが、ただし蕭漢中は元代後半の人士である。巻一：元包数義、巻二：潜虚図（司馬光）巻三：卦序図（蕭漢中）巻四：混古始天易（田藝蘅）巻五：三十六宮図（朱昇）巻六：論乾龍義（管志道）巻七：陰陽管見（何塘）巻八：陰陽管見辯（王廷相）巻九：象緯新篇（王可大）巻十：楽経源流（呉繼仕）巻十一：楽律管見（何塘）巻十二：太和元音（李資乾）巻十三：歌学解（林兆恩）巻十四：詩論（程鴻烈）巻十五：酌古文武礼射図説（林兆恩）

次に第十六巻以降巻末までの書名と著者名とを挙げる。上記の自序にも言う「復性書」以外は、すべて明人の文章であり、大全書編纂以前に活躍した宋濂・劉基・王禕・方孝孺の書物もまた含まれる。巻十六：大学略疏（劉元卿）巻十七：読書録（朱俊柵）巻十八：復性書（唐・李翱）巻十九：中説（于鑑）

卷二十：道論（薛瑄）、卷二十一：新論（湛若水） 卷二十二：陽明語録（王守仁） 卷二十三：白沙要語（陳献章） 卷二十四：潛溪遂言（宋濂） 卷二十五：郁離子微（劉基） 卷二十六：華川卮辞（王禕） 卷二十七：侯城雜識（方孝孺） 卷二十八：近思雜問（陳埴） 卷二十九：心聖直指（林兆恩） 卷三十南遊会紀（王畿） 卷三十一：礼元剩語（唐枢） 卷三十二：凝齋質（筆）語（王鴻儒） 卷三十三：秣陵紀聞（楊起元） 卷三十四：三山麗沢録（王畿） 卷三十五：經世要談（鄭善夫） 卷三十六：伝習存疑（郁天民） 卷三十七：九解（周汝登） 卷三十八：古言（鄭曉） 卷三十九：約言（薛蕙） 卷四十：求志編（王文祿） 卷四十一：困知記（羅欽順） 卷四十二：正誤（郭孔太）

鍾人傑は、何故、明人の著作を蒐集し、それを大全書の続編と位置づけたのか。その意図は、張延登による序文から推察することができる。張延登は、「道学」を尊ぶ崇禎帝にこの続編を「進呈」し、かつそれを大全書とともに流通させることを願った。続編の地位を、永楽の大全書に準ずる明朝認定の書物へと上昇させようとする意図がうかがえるわけである。

清朝順治年間から編纂が始められた応搗謙の『性理大中』は、かれの逝去後の康熙二十五年に刊行された。この書物は道統およびそれに連なる人士を重視する点で、姚舜牧の『性理指帰』に類似するが、所謂成書よりも語録を尊重した。成書に対しては「大儒之微言」と位置づけ「非学者所易曉」とする。応搗謙は、まず「語録」を学習してこそ、成書を「深玩」することができる考えたのであり、難解さに関する認識が姚舜牧とは異なっていた。また「凡例」第五条に「原集程子多從刪改、今從程子遺書訂定」と言うとおり、明代中期以来、大全書における二程子の位置を向上させる傾向が強まっていたなか、かれもその潮流に従ったわけだが、「語録」重視の姿勢が、このような選択を後押しした。

康熙帝が編纂を命じた『性理精義』は大全書の欠陥を二点指摘する。ひとつは文章の選択が繁多なことであり、もうひとつは採択した文章に対する分類項目が不精確な点である。同書は、大全書後半の「語録」については、大幅に簡素化させた。こうした削除の方法は、凡例第五条に「此書以性理為名、但令学者用心実学、以知聖徳王道之要」と言うその精神の反映である。性理学の根幹に修己と治人が位置することから判断すれば、それらに関連する文言を示せばそれで性理書としての義務は果たせたと捉えたわけである。大全書前半の成書と末尾の詩文の扱いに関して、『性理精義』は基本的に先人の見解を踏襲する。太極図説・通書・西銘は、朱熹の解釈とともに全文を掲載する。正蒙と皇極経世書に関しては、「較之近思録則已多、而以視全書則甚約」（凡例第二条）として、多くを省いた。正蒙の難解な文章を如何に解釈する

かとの問題について、『性理精義』は「集説」という注釈を附し、そのなかに「補註云」という解説を置く。明朝嘉靖期に登場した増注本の「補註」が利用されている点に注意したい。成書部分に対する節略の仕方は、明末姚舜牧以来のそれと近似するが、二程子の「定性編」や「好学論」を一箇の成書として扱ってはいない。これに関しては「凡例」第七条に、太極図から通書までは朱子の注釈があるとしたうえで、その他の書物につき、「諸儒解釋皆擇其精切明當、有發文義者存之、無則闕之」と述べているのである。

『性理精義』は、その学習者に対し博識であることを求めてはいない。成書の扱い方に関しても、朱註を尊重する以上の学術的な情熱は示さず、従来類書の多様なこころみを無視するかの如き冷淡さすらも感じられる。いわば学習者の性理学的認識を、一定の枠内に閉じ込めようとした。勅撰の書物である以上、そうした政治性を持たないことは在り得ないわけだが、ただしその枠の広さは、永楽の大全書に較べて極端に狭い。しかしながら、清代中期の人びとは、その狭さを受け入れた。その意味において、この書物は、大全書に対するそれまでの多様な改訂運動に対しそれを転換させる役割を果たしたわけである。

## 5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕(計 6件)

①三浦秀一「明代宣徳、正統期郷試解額制度的影響」、『教育与考試』(福建省教育考試院) 総 57 期、pp.5-17、2016 年 5 月、査読あり。

②MIURA Shuichi “The Profound Intent of Valuing Both Men and Law”, ACTA ASIATICA No.110、pp.39-59、2016 年 2 月、査読あり。

三浦秀一「明末清初時期《性理大全書》の伝播と接受」、『貴陽学院学报』(社会科学版) (中国・貴陽学院) 総第 43 期、pp.30-37、2015 年 1 月、査読あり。

三浦秀一「湛若水「二業合一」論とその思想史的位置」、『集刊東洋学』第 112 号、pp.62-81、2015 年 1 月、査読あり。

三浦秀一「明朝の提学官王宗沐と王門の高弟たち」、『日本中国学会報』第 66 集、日本中国学会、pp.143-157、2014 年 10 月、査読あり。

三浦秀一「人法兼任の微意 - 明代中後期の科挙および督学制度と思想史」、『学問のかたち - もう一つの中国思想史』、小南一郎編、汲古書院、pp.223-265、2014 年 8 月、査読あり。

〔学会発表〕(計 9件)

三浦秀一「良知説の行方」、応用科学史学研究会第17回研究集会、2017年9月20日（アクロス福岡）

なし（ ）  
研究者番号：

三浦秀一「明朝提学官与各省郷試」、第十四届科举制与科学学国際学術研討会、2016年12月20日（中国南京市・南京中国科学博物館）

(3) 連携研究者  
なし（ ）  
研究者番号：

三浦秀一「《新刊性理大全》の出現及其時代影響」、明末清初学術思想史再探国際学術研討会、2016年6月25日（台湾台北市・中央研究院近代研究所）

(4) 研究協力者  
なし（ ）

三浦秀一「明朝宣徳、正統期郷試解額制度の影響」、第十二届科举制与科学学国際学術研討会、2015年11月24日（中国厦門市・厦門大学）

三浦秀一「江門心学与科举」、2015 心学国際学術研討会、2015年11月15日（中国増城市・万子豪程大酒店）

三浦秀一「外簾の干預：明代中期各省郷試與思想史」、第十一届科举制与科学学国際学術研討会、2014年11月14日（中国広州市・広州假日飯店）

三浦秀一「提学官王宗沐的思想活動與王門高弟」、第三屆国際陽明学研討会、2014年10月31日（中国余姚市・余姚賓館）

三浦秀一「《新刊性理大全》の出現及其時代背景」、「明末清初学術思想史再探」第二次工作會議、2014年10月25日（中国武夷山市・武夷学院）

三浦秀一「湛甘泉の二業合一論及其影響」、「理学与嶺南社会文化」国際学術研討会、2014年6月27日（中国仏山市・中山大学嶺南文化研究院）

〔図書〕（計1件）

三浦秀一『科举と性理学 - 明代思想史新探』研文出版、2016年2月

出願状況（計0件）

取得状況（計0件）

〔その他〕

ホームページ等：特になし。

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

三浦 秀一（MIURA, Shuichi）  
東北大学・大学院文学研究科・教授  
研究者番号：80190586

### (2) 研究分担者